

### 淳風良俗 v s 家族制度の崩壊(その 3)

榎場 雅子

(臨床心理士・精神保健福祉士)

○ 親子から 親と子になる時がきて との一字の ふくらみやまず

○ 子育てと介護の分母 終わりたり われも分子となる日 来るらむ

二首とも平成 22 年 4 月、NHK 短歌の「子」を題詠とする投稿歌の中から、惜しくも選に漏れ、「上達のワンポイント」として、選者坂井修一先生の添削を受け、生まれ変わった佳詠です。

「子」を詠った秀歌としては、誰しものが思い浮かべるのは、万葉集に収められている山上憶良の

○ 銀も 金も玉も 何せむに まされる宝 子にしかめやも ではないでしょうか。

子を思う原点ともいえるべきものとして、語り継がれています。「子宝」という言葉もあります。ここまで真っ直ぐに歌い上げた、憶良の心情の深さと言葉の強さに感じ入るばかりです。

子を思う親心は、人類普遍のものでしょうか、その背景にある社会は、千三百年も昔の万葉の頃にくらべて、現代社会は複雑さに満ちています。そこに生きている、家族の関係にも親子の関係にもドラマがあり、時代の変化が透けて見えてきます。

「親子から…」の歌は、青年期を迎えた我が子を見守る父親の思いの深さを詠じています。「親子」とセットで考えていた関係から、「親」と「子」の二人の関係へと移っていくときの、複雑な思いが、やんわりとずっしりと、伝わってきます。

青年期は、子どもから大人に移るまでの期間です。親への依存から離れ、社会の中へ自分の足で歩み始めるまでの道程です。大人として社会へ踏み出すには、親との関係を変える必要があります。まさに「親ばなれ、子ばなれ」の時、「親子」から「親」と「子」になる時です。

日本の社会体制は、青年に大人になるまでの道程で自己同一性（identity）を獲得するまでの「猶予期間」を与える懐の深さを持っています。それは経済的、文化的余裕があればこそそのことで、モラトリアムと呼ばれています。モラトリアムは、本来は金融用語で非常の場合に、法令で一定の期間、債務者の支払いを猶予することです。

この用語を青年心理学に導入したのがエリクソンで、「青年期は自分の生き方を見つけるための貴重な期間です。目的達成のため、成長のために、立ち止まる期間が必要です」と説いています。青年の多くは、程度と期間の差こそあっても、挫折と出会いながら成長して、大人になってから、「親」と「子」は、甘酸っぱい思い出として、当時のことを語り合うことができるようになります。

ところが、大人になりたくなくて、モラトリアムを隠れみのに現実から逃避し引きこもっている若者も少なくありません。「親」と「子」の健康な関係を結ぶべくありません。

少子高齢化の問題は、長生きできた多くの高齢者を少数の若者が支える肩車の支援の問題など、家族だけでは支えきれない問題も浮上し、政府の家族福祉政策の重要なポイントになっています。「と」の一字は、ひとり「親」と「子」のみにとどまらず、広く対人関係についての問題として、一人ひとりが感じ考えなければならない、今日的な社会の課題ではないでしょうか。

「子育てと…」の歌は、伝承的な「女の生涯」とでも表現されるようなことを歌っていますが、その底に流れている、現代社会の市民感情が籠められていることを見逃すことはできません。

くり返しになりますが、激しく変動する社会は、基本的な家族機能にも変化が起こっています。核家族化によって、女性の家事負担を軽くした一方、血縁・地縁の希薄化は、若い母親の育児不安、育児ノイローゼ、親による乳幼児虐待などを出現させたとの説もあります。それは、以前にあった嫁姑の問題や親戚とのトラブルと引き換えに起こってきたようにも言われています。

母親としての育児行動は、育児書を見ながらも母親や祖母などに尋ねて、伝承的に受け継がれてきたものですが、最近はその揺らいでしまっています。人間成長の基盤となる乳幼期に、すでに大きな問題を背負ってしまっています。

学童期になると、早くも能率主義、競争主義にまきこまれ、互いに愛し合い、かかわり合って、仲よく助け合って生きていくことが、軽視されがちになります。結果的に人間関係のつくり方や、社会性やフラストレーションへの耐性を身につけるチャンスを失ってしまいます。連鎖的に影響を及ぼし、不登校、いじめ、自殺、無気力などが起こっているとも考えることができます。

そして、いよいよ思春期～青年期。前述のように、親離れ・子離れするとき、親との関係を変える必要があります。親の指示や価値観ではなく、自分の力であるべき自分の姿を作り出そうとして、親からの離脱を試みます。心理的に不安定となって、混乱はそのまま行動化することもあります。親は自分自身と向き合うことで、子どもの言動の意味を理解し、見守る余裕を持つことができます。近年は、この期の終わりは30歳頃と言います。人類は成長のペースを落とし始めたのでしょうか。

子育てが一応卒業する頃には(或はそれ以前から)年老いた両親の介護、見送りも待っています。年齢的には、50歳から60歳になっています。夫(父親)は、勤務先でもそれなりの地位を得て、家庭でも社会でも、それぞれに重い責任を負いながら歩み続ける年代です。

ところが、この充実した生活の裏側に、体力の衰えと老化現象が密かに忍び寄ってきています。心身のアンバランスがみられ始め、ストレスに出会うと、もろく崩れてしまうおそれもあります。

しかし、適度のストレスは、精神機能や生理機能を高めることも、広く知られています。「分母」として完熟するこの時期こそ、心身共に健康で充実した実りあるときとしたいものです。「分子」の時期になっても、家族や友人との関係のあり方によって、さまざまな意味合いを持てきます。来月は、このことについて考えましょう。

師走になり、何となくあわただしいですね。どうぞ、よいお年を。

## 〈こころの電話相談室〉

心の悩み、心のケア、心の健康に関する電話相談室をご利用下さい。

相談日 毎週木曜日 午前9時～午後9時

相談担当 榎場主任相談員 電話番号 04-7100-8369 個人情報厳正に取り扱います。

〈市民のまなざし〉★有吉佐和子が『恍惚の人』の中で家族介護の限界と介護の社会化を訴えてから約40年、今では介護サービス利用者が600万人を超えました。★超高齢化、超少子化社会から急激な人口減少時代に転じた今、現在の介護・医療・年金制度の維持が困難なことは自明の理。就職氷河期以降の若者の約4割が非正規雇用とか、若年層から高齢者への所得移転政策はもう限界でしょう。不公平観が一段と増幅し、世代間戦争が必至です。★受益者負担の原則を無視した「高福祉低負担政策」が過剰介護、過剰医療、過剰投薬を招き、国に膨大な借金を残し、将来世代に過重なツケを回す。このままでは社会の健全な生命力まで涸らしかねません。★介護・医療・年金制度を支えている現役世代に感謝し、子や孫の世代の負担軽減を優先する。高度成長時代の最大の受益者の当然の努めです。人生永遠の書『檜山節考』の行間に込められた不思議な教えです(h)。独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業